

ま え が き

政治，経済，社会，文化など様々な領域から構成される一国の全体をひとつのシステムとして見立てた場合，国家機構の頂点に立つ統治者は，システムのあり方に大きな影響を与える存在だといえる。ことにアフリカでは，20世紀半ばから今日までのわずか半世紀あまりの間に，強烈な個性と絶大な権力を備え，かつ長期にわたり在任するような，突出した統治者が何人も登場してきた。これらの統治者は，まさにシステムの構築者として，一時代を画して君臨してきたといえる。

とはいえ，法の支配や制度化が十分に進展していないとされがちなアフリカ諸国であっても，統治者は，システム全体をゼロから構築しうような超越的な主体では決してありえない。それどころか，イデオロギー，権力闘争，統治スタイル，権力基盤などといった，統治者その人に深くかわる特徴は，統治者本人が置かれた所与の環境や諸条件と深く結びついて形成されるものである。この意味において，統治者はシステムの産物でもある。

システムの構築者であると同時に，システムの産物でもあること 統治者がこのような両面性を備えた存在である以上，統治者を論ずることは，システムとの相互作用もしくは相互規定的な関係のなかで行われなければならない。これが非常に困難かつ厄介な課題であることは想像に難くない。しかし，この両面性にこそ，研究対象としての統治者の豊かな可能性があるように思われる。

このような統治者認識を基本的出発点とし，特に国家との間に紡がれるダイナミズムのなかで現代アフリカの統治者像を捉え直す。本書表題の「統治者と国家」は，このような狙いを込めた意思表示である。

本書は足かけ3年以上にわたる共同研究の成果として上梓されるものである。2004年春頃からインフォーマルな意見交換が積み重ねられ、同年秋に、「一時代を作ってきた統治者、システムや制度に強い影響力を振るう突出した個人」ないし「1960年代から今日に至るアフリカ政治、もしくは世界におけるアフリカをイメージし直す手がかりとなるキーパーソン」に焦点をあてることで、いかなる新しい知見が開けてくるのか、という基本的な方向性が固まった。

そこには、1990年代のアフリカ諸国における民主化の進展をひとまず前提として引き受けたうえで、民主化や民主主義といった研究視角のみに呪縛されることなく、民主化以前の時代から連綿と続く政治史の展開と国家形成を視野に収めた研究視角を確立したいという編者なりの切実な思いが込められていた。それを踏まえ、2005年度から2年間にわたり、アジア経済研究所の研究事業「アフリカの個人支配再考」研究会が実施された。

共同研究を終えての率直な感想をいえば、統治者は、当初想像した以上に深みのある研究対象である。統治者は、一個の生身の人間であるばかりでなく、制度的存在でもあり、シンボルでもあり、さらには神話でもある。断固として恣意を貫徹する主体然として振る舞うこともあれば、寡頭支配集団と同化したエージェントと化することもある。このことは、統治者が、性質と水準の異なる様々な人間関係の結節点に位置する存在であることを意味している。このような存在である統治者を描くことは、ある特定の時代と場において実現されている人間関係の束そのものの記述に限りなく近づくのかも知れない。

むろん学術研究の方法論においては、統治者が有するこのような広がりのある全体像のうち、限られた側面しか扱うことができない。しかし、寄稿者それぞれの視点から統治者の持つ様々な側面を切り出した本書は、全体として、多面体としての統治者像を鮮やかに描き出すものとなったというのが編者の考えである。むろん、これで統治者に関する論点が網羅されたというつもりは毛頭ないが、統治者という切り口が、現代アフリカの政治と歴史に深

く切り込む，豊かな可能性を孕むものであることは少なくとも示せたものと確信している。

上梓にあたり，研究会での議論を盛り上げてくださったオブザーバー諸氏，ならびに様々な形でコメントをお寄せ下さった皆さんに感謝申し上げます。

2007年 8 月

編 者